



小栗外傳二編





本邦此源治唐山此水滸傳、妻鏡多しを  
其又金玉に續く正史と人尚是を  
賞し自ら勸懲の助とせり爾れ此式部  
は免し地獄と羅羅氏孫唾兒を生りてと  
和漢妾説と作為す戒とす予漫るる虚説  
と録す心と覆後車の戒と不思不知りと踏  
しつゝ下とを案早と閑不審曰先生此  
すはと何とぞ新しと事家伝の言案曰

笑曰波二書ハ先生此言乃如く爾とて是は  
大集此罪の先生此編述はと事いふ事  
其妾鏡とを明白とて福と初妾の助と述  
燈下の戯墨と詩と善戯謔とを此處と爲  
とてやいとや何れぞと強よと乞と辭  
かゝる終よと事記と事辭やと雨

文世甲戌孟春

峰山樵夫題





花兒

妬寵而  
負恃爭  
妍而取  
憐



水戸小舟

兄弟鬩于牆外禦  
其侮

水戸小四郎



不化而自行  
蕩之乎  
人無能  
名焉



不治而不亂  
不言而自信

万長  
まんちやう



小栗外傳二編目録

○卷之七

忠臣先非を悔て自ら劔下伏を  
貞婦艱苦を忍で能く操を守り

第十二編

貞婦艱苦を忍で能く操を守り

○卷之八

處女仁堂小画像を春恋を  
貞婦浴室小良人小奇遇を

第十三編

第十四編

悪漢命を墮を昔鼠の罠  
忠臣主を救ふ赤坂の原

○卷之九上

第十五編

忠義を擧げて全の身を救ふ  
遺金を全して亡兄の志を果す

卷之九下

第十六編

両雄激しく居を濃洲に後を  
奸婦怒り怨を草庵に述る

○卷之十

第十七編

奸婦念死して妖祟を為す  
名馬苦辛して孤忠を果す

○先生所著小栗外傳六卷と文化丁卯の春稿を此編も編て

藁を脱せしむるも、刑剛氏の功速なるが故に前六巻に替り

初編として既而文化癸酉春發兌せり。此編同刻成て發賣とされども

初編を閲むるは童幼の爲に其要を擣む。こゝに誌したる如し。

○應永六年鎌倉友成足利左兵衛佐満兼公の時をとりめとて其比

満倉佐々女谷の初なる堂を怪し夫あり。此観音堂の昔矢日津はて討死を

遂に新田義興主従十一人の靈を祭り処に用ひ一色詮秀満兼公を

勤めせしむ。小栗孫次郎満重名武常陸公篤光とをて觀音堂を破却

さして其附堂の下に坑あり。十一の光物出現を是則ち我興主従の靈を

此附再び世に生れ義興と小栗が家子生れ小次郎助重とす。即ち

所々生れ生れ生れ奇傳のり後遂に前世の因縁を引く。今世でも

主従と好む。其十人皆世母勝且つは英雄の豪傑。さてまゝ名武馬光の  
豫さく佐々女谷の祝世音と信とを殺し観音堂を毀てる時本尊を取らば  
持佛とせり。其後祝世音は利益を因りて照天姫とまらけり。祝世音を殺す  
本意とてかゝぬ。然る小栗と名武と親き中なるも小次郎と照天と年紀  
似ゆらして許嫁とて親を固くと夫より程経て一色詮秀小栗名武と怨む  
ゆゑ名武と妻待従の身横山安秀と議て名武を密に害しつゝ横山の名武  
の家を侵奪せんと信を以て行徒照天を欺き二人を俱して相模國権現  
堂村に忍びこむ。村を窺居る。應保二十年。鎌倉の友成持氏公は時一色が  
謀りよめて小栗満重亡び失ぬ。是より鶴小栗満重藤波と云妻とて代  
と云を生ぜり。若浪罷り濟り我子小栗家を嗣とてく。助重は諫めて追出せり。  
今も宿存せられて十人の郎と下従の結城は忍居る。其内父の一色は  
洗害せり。はとて又信を頼んと。湯合ふ赴く途とて不圖も横山の家あり。照天姫  
と智縁せり。横山虎狼の心を懐く。鬼駟の馬と小栗と食殺させんとせり。かど  
ねは又毒酒りて害せんと謀る。小栗是と推し。照天と郎を俱して横山が  
家を逃れ六浦の方へ走り。横山が追まの勢を逐逼られれと戦ふうち。  
照天は去向を失ひ尋んとて又友成に尋ね。南阿上人より過去未だのゆゑと  
示され。小栗村運の身もぎねを悟り十人の郎をばね。三州に支城村に至る  
村居る。又照天姫の豫と召仕。玉子と城とゆゑを俣て逃匿し。玉子も横山が  
追まのゆゑ殺され。城と二人六浦まで走り。日暮るれば漁人の舟に宿を借る。  
この小栗といふの。あつた。此小栗は名武の臣なり。主家亡びて后に忍びり。  
さて其妻の小栗は妻若浪の足も主家亡びて後方より舟を連てり。嫁せり。  
又娥の若浪が前夫と連し。舟出生子。其夫死て若浪小栗かゝりては

是の時城を去る人少き。音聞きてのりし不意母子對面と喜びて城を  
 忠あるものもて姫の母を頼みしが藤浪悪心を棄て姫を殺し隨才の  
 寶を奪ふんとて夫を殺し我子二人を殺しこれに悔ひて姫を捉へ松葉薫  
 責すふあみし母祝音の利益ゆりて姫を其場を逃去瀬戸橋より再び  
 波浪不捉く是既母殺すはかりを姫の母かかれを取橋より川へ身を  
 投し不意人買船の裡に落止り其時付夫少少此橋におもむるを波浪  
 かく縁故を問ふ橋より流しを照天と云ふ大に怒り波浪を斬りし  
 人買船の殿を追ふ走り云々六巻に書きし侍りぬ其中喜喜奴心  
 愛樂の事と云ふおかしう後なる世の懃懃の意自ら侍りぬゆめを得て  
 読ふ人しと云ふの事。 采花山人巖堂謹誌 元

寒燈夜話 小栗外傳卷之七

東都 絳山戲編

第十二編

忠臣先非を悔く自劔あ伏  
 貞婦艱苦を忍で能操を守

且説照天姫と瀬戸橋より身を投じ既に入水と云ふりし不圖も漕舟ある  
 舟に落止りしが忽ち心失て幾入り。そも此舟は是國戸美登が乗  
 舟に甲夜子波浪と約するところにて目今漕舟あるゆへ有り。美登と  
 橋の上より一人の女性ののが舟に花落しおぼろに立出くえれば橋の上  
 中へ云罵る声々々何れも弁かなく或は内亦の潮よりに  
 女を執くところへ入るふ年九なるにものなりはくん教貌のいみづく



めて中 災敷たるは好衣きて脱しかたは尋まぬと我主の  
 姫君もてまゝはきとやとせよと命を會はし水灌多く今抱えり一盞茶付  
 のりて人公地はき復古なりし美登と語を和め女性にうなる人よ在て  
 何れ急流は合ぬ及び多し明白お語りのありは才の為悪くならんこと  
 のまじりしと信実お父えは照天姫と前刺波浪は実事と明し幸れぬ  
 又ははらとかなればいそ戀ある今美登は光景をみるも手あはよ  
 つれの五十おもるねと見え脊をゆびまの小山のごとく顔は鳥羽玉の  
 念じつとて何さぬ曲者とてなれば又波浪がこくならんと云ふ  
 はわいとし奴家の常陸國の産みく名を小萩くやとてぬ去来  
 圖戸のぬも勾引され當國権現堂村と云所の横山といふ者のめとぬ  
 家婢は喜波渡され三年は彼所あり夏このみよて易記日なれば  
 いらぬもして脱し出せりと之と其間をぬきと然るも今日よき際をぬき  
 我も始りぬ女のぬひはるがこれと疑ふ二人おぼく横山が館を志のび出  
 づぬしして走りしお不知案内道なれば此地方は吟呷するにふ  
 日と暮ぬ行先も定まらぬ此川上の一盞お一夜の宿を求むて  
 少くぬ易ぬしお主の女が鬼しく奴家二人を切害し衣裳を剥くと  
 さらきぬらぬおむ本は酒漏ちりひ二人其家を脱し出せぬ忽ち主  
 お追逼られ連たは女とや已は殺されぬととも脱れぬ秋なれば  
 人おかると取らんよの漂く入水して死んぞりのと身を痛し梅の  
 花にお不図おんお助けられぬおの身は幸なりし  
 きてりの慈悲は奴家と此より脱ししおと信実と信実と信実と信実と

言は巧母かたは流る。おのが名を小秋といひら夫木集也。

秋うらぬ花おはる海やさあはし。霜お枯るる秋末の里

といふ常陸の各亦おむりひし。て云一好々。一矣。登の熟と打

居りしが。訝らとほおひし。女性の宣ふ正公を好む。於本年之つ。の

我も常陸の生なれ。彼國のことは社知りぬ。然るに女性のめを云ふ

老陸人といふおれを。是二つあり。又家婢となりて居ると宣ふと。容貌

の驚く。手足の清らかな。ほい。いづさる下雑業を志する人なる。是

二つあり。又今宵宿うり。のるか。家主の女。友浪といふ。ありのあて。さ

姐々等と我お賣入といひ。強欲の人。彼なるに女性等と殺して。

扱をさ。はりのな。ん。足ニつし。此不審あり。思ふ。女性。と。武

篤光公の息女。照天姫。少て。ほ。ま。ま。り。それ。我主なり。

我の名武累代の臣美登小四郎。為國之往昔。主家盛入る。り。財を

常陸ま。あ。ひ。て。主君お代。て。國政を司り。海近。遠。倉。お。坐。る。る。あ。れ

ども。男子。これ。外。振。も。大。殿。の。え。ま。ゆ。り。の。女。奥。方。ら。ま。ま。い。ゆ。と。

姫君。ほ。ま。ま。し。知。れ。と。ん。ま。あ。し。は。こ。も。お。し。され。姫。も。某。を。ん。知

あ。あ。こ。い。ま。し。然。れ。ど。も。人。の。物。語。を。て。姫。君。の。容。貌。を。お。し。て。知。り。ぬ。世。中。を

似。る。人。の。あ。り。と。い。は。す。ど。女。仕。の。お。し。せ。ゆ。と。な。く。大。殿。篤。光。公。に。似。ゆ。る。か

中。う。お。同。の。某。姫。君。の。は。去。向。を。捜。索。ま。か。へ。せ。ん。と。斯。る。う。り。身。を。中。に

ゆ。我。忠。志。を。憐。れ。と。お。い。は。す。實。を。明。し。終。ら。れ。と。休。る。な。い。は。ま。こ

ゆ。れ。と。照。天。姫。に。これ。も。あ。ら。う。と。偽。証。て。我。名。を。告。告。し。兼。命。お。將。て。行。く。人

とは。術。を。め。と。疑。公。に。お。ま。さ。り。て。ま。ま。と。ん。み。さ。る。人。を。ま。も。り。及。び。ま

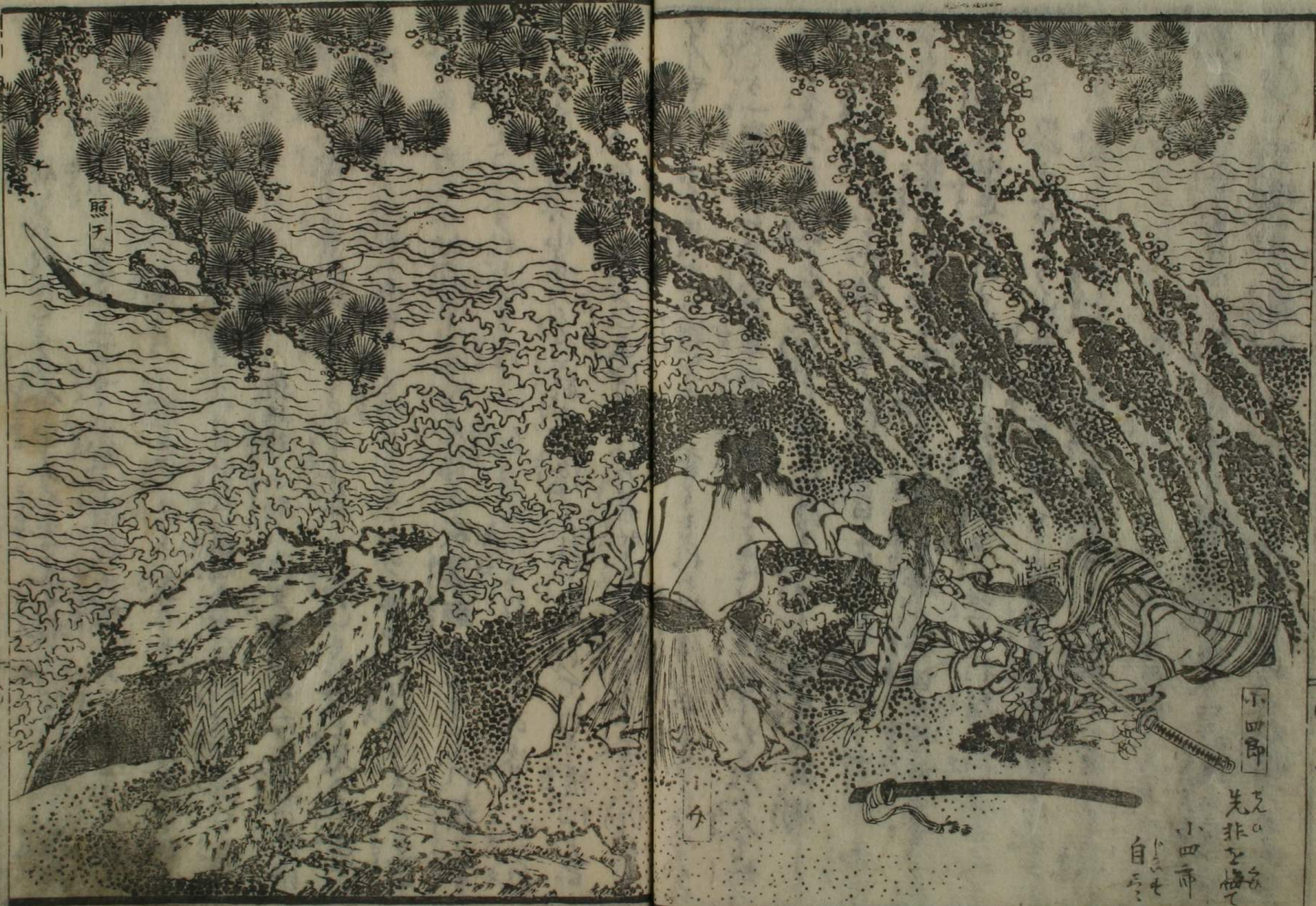
ま。げ。あ。ら。う。と。某。も。ま。ま。と。尚。ま。ま。お。同。と。れ。と。後。の。回。意。を。お。せ。と。う。ち。伏。し

小栗卷之七

九

居々あそび足登る赤心を傾けて説きゆれど我こそは照天なりと  
名告後さすよりおきりのなりし我実名を明せしと今又悔ふ  
詮なれぬからに此女奈何方へ賣とせし徳はくとりて腹愈ん  
と悲小怨へ不意園戸仲間よ名をひくは三田の小巻一艘の舟は棹は  
漕ましうがの幸ひと呼とあよれ時うら小遭うらを汝よんをるため  
の向は這方おあよと叫かられ小巻の叫と回意くまゆめをさ  
あまらる美登の喜ひ嘆居る姫の手とりて舟梢に牽牛紙燭は  
教はさしはけりいり小巻汝う此女はを買ひたり宜万利のあ  
とやと心と傍うおせこゆは小巻の姫が教をせと熱くとらち着は  
近年着さは買物ながら夜眼を目とらしとあり鑿抜まじきとの  
あもわは汝の胸の筭盤とら此の差とあふたれと二百貫ゆり賣

なんやとらあは是の頭をの否くそれの欲除し小巻とらり  
我う一斑のうちの大將軍此生業のことゆは死仕扱ならぬ人も知る  
いり母夜うりと云とも顔と顔とをけき命一盞茶所紙燭  
教の穴の明やふ熱く着られ盲目を知れと老さとあひし老眼  
てもあまらる鑿抜めり心まや我まらるあふ大磯の粧坂の娼妓お賣ら  
五百貫の必定かれと汝の甲は知識あり此の利徳をひきとせ  
叫とめてえせうらふ其好意をしげめて我買物不祥とら  
さぬこそ易くは千巻のあも無益に賣らぬ如くと云つても舟を  
買とせんとそれの小巻も慌忙おとらめやよ美登よるごとく  
急あつて賣買のころの客ん年うらるは扶失ありけれ近日は  
まじく買損多く擔物して幾許の損ととられぬ公獲つて鑿定



照子

小四郎

先非を悔て

小四郎

自ら

今

かろく。汝も腹をたじし。今少くも我はほほしめんと。角  
りて。價を争ひ。遂に三百兩の錢を換照天姫を。小鷹がうけ  
移し。身をまじひ酒を酌ら。別を告ぐ。去りまら。美登と姫を  
小鷹は賣つ。利をばら。心と慰め。身の代り。身を賣る。肩  
荷ひ。我をさして。還り。これ。此時。小助の。瀬戸。橋。おぬて。妻の。波  
を殺し。姫の跡を慕ひ。此地方まで。走す。おぬひ。も。か。ひ。を。見。の。小。四。郎。は  
行遣る。折ら。夜。の。あ。の。ぐ。と。羽。の。り。山。の。峰。を。む。む。比。が。む。む。互。ふ  
それと。あ。ら。り。小。四。郎。の。小。舟。を。入。れ。お。ぬ。ひ。の。衣。裳。鮮。血。ま。ま。う。れ。顔。色。も  
常。に。變。て。入。る。ね。が。いと。行。り。て。同。く。ら。お。ぬ。ひ。の。姿。を。お。ぬ。ひ  
を。想。ひ。み。り。行。き。ぬ。ぐ。ひ。云。り。た。は。某。昨。夜。を。細。り。還。る。折。ら。り  
門。辺。に。お。ぬ。ひ。で。不。意。に。妻。を。浪。が。ら。り。と。く。く。出。行。ゆ。り。遣。ら。り。其。ま。ぬ。い。の  
怪。し。ま。れ。何。方。へ。行。も。と。同。く。お。ぬ。ひ。の。回。意。を。せ。し。て。走。去。れ。ぬ。海。に。お。ぬ。ひ  
家。裡。に。入。り。お。ぬ。ひ。不。審。し。も。妻。の。連。子。の。死。し。て。お。ぬ。ひ。の。姿。も。い。う。ふ  
縁。故。を。お。ぬ。ひ。の。妻。も。知。り。め。と。跡。を。襲。え。り。よ。よ。這。所。よ。く。尋。ね。お。ぬ。ひ。の。瀬。戸。橋。を  
ま。く。り。お。ぬ。ひ。の。一。人。の。女。性。を。責。さ。し。ら。み。殺。さん。と。お。ぬ。ひ。の。刀。の。下。女。性。を  
お。ぬ。ひ。の。身を。踏。ら。り。橋。より。川。へ。飛。り。お。ぬ。ひ。不。料。舟。の。漕。ぎ。ゆ。り。お。ぬ。ひ。の。援。け。ら。り。し  
と。お。ぬ。ひ。の。舟。を。潮。に。流。さ。れ。て。沖。の。方。に。去。り。其。時。お。ぬ。ひ。の。波。浪。は。遠  
近。は。ひ。く。身を。投。げ。お。ぬ。ひ。の。身。を。お。ぬ。ひ。の。同。く。お。ぬ。ひ。の。傷。ま。り。も。橋。より。お  
女。性。も。照。天。姫。と。お。ぬ。ひ。の。身。を。お。ぬ。ひ。の。愕。然。として。呆。れ。お。ぬ。ひ。の。善。と。悪。と。を  
弁。せ。り。主。の。仇。を。お。ぬ。ひ。の。腹。に。お。ぬ。ひ。の。縁。故。を。お。ぬ。ひ。の。唯。一。刀。を。お。ぬ。ひ  
切。殺。し。て。お。ぬ。ひ。の。跡。を。慕。ひ。尋。ね。お。ぬ。ひ。の。前。に。お。ぬ。ひ。の。着。る。お。ぬ。ひ。の。舟。の。何。方。お

東海道

二〇

のりともあつて彼の烟おまきられんさされんはゆとせんとなくも世所さく  
 事さくふ見人遣く力をひきりし今より同胞力を合尋知く世  
 年心ゆを碎し孤忠を遂入り一這取の台船をえまふこのはくを  
 やと舟の掙根を渡す話が小四郎これをやまよぬ我身よえあつたわが  
 おのれが罪を悔ひ怨之慙愧の涙さくみみて頭を低く回意は小助  
 と不審さくよつてあつと不審事とやめさくはく胸好くたり俄お積  
 の奔しう嶋くあつた見人としんとさくくつし舟の舟うちむの舟は  
 舟の頻おせりしとと見ん強くとさくなまうは用ふひ疑やく小介を  
 膝をとりはしてよめやと想へと家あすの心をそくきぬくお同と各の  
 宜つとさくさうあつて居あつた我邪らん知く秘とも姫を助し其舟の則  
 あんこの舟あつて生業なれが姫君をたぶ尋常の女性とさひあやまう

何とて賣渡らん志あつたやそれら多くの錢金を持あつたを  
 引糸といつてまきとく小四郎が舟の多踏の支がく刀をぬくとえん  
 志う腹まぶさと突くとつり小介の慌忙をさくえん狂まじ志まふ  
 何等の故れ生害と縁故を生けもせと我の嘆きをえせまふ嗚呼わん  
 ならん心やと涙まじやふ怨とれが小四郎苦しい自分を衝ゆめく狂氣世  
 あつたあつたこれあつた深き子細ありをを静めやあひく後の多踏お  
 けしそも其縁故といつた汝が妻なりを浪が甲夜よまありてひひつる  
 今夜不図をさくまき女性二人をひきりやぶあ買んと想か心あつた  
 舟まかせと慌忙く云はし行を生業のことひくあつた其跡を陰に  
 折悪たれが瀬戸橋ふして結くとあつたまう彼下お生余んと物  
 をかめて家よ還り舟よりち瀬戸橋へ漕行とさうお不審橋の上

有りやどなれ一人の女性の飛着てそのまゝそまゝ終入を助け起して  
 介抱し熟く入るふゆとなぐ故殿の面はあつてり姫君のあはれ  
 ちと赤心をうちあけて姫君のちやと伺うと我容貌は鏡りちや  
 宜しきを明しめらるゝと嘘言をのこ宣ふさうては姫君のあはれ  
 と思ふ公のほろろ折るゝと三田の小倉姫と一目見るよりも頻  
 らめて價よく買入とのうも欲心の登りこそ我不運りちのあはれも  
 主人を賣公樂しくする道めては汝も遭く姫君とをトめて知らる  
 不忠の科今世若菜の地主人は罪を贖ふ自害ぞや汝らの後姫君を  
 尋出しく此金りて授けまわらせ我科を宿めてはきし後我の  
 の廉急を悔之泣涙血一色ませり小介の兄が心根をさこそを念  
 ぬめりめと答ふさふはけて云る我言語は悔之は涙をさこそ

徹

まりのなれちやまうりあはれ人よと生業のゆがれた人よ主人  
 かなげとてそれと知らぬが賣りては其の身の存せん過りて改む  
 憚らんと聖人の教もゆる今姫君と知りては買入は人を尋ひて姫を  
 賤しむわいせの不知の罪の負ひはかむのるる知らんよとちやま  
 らめらるるを忍ぶまじし某に悪く云はるゝと憤り前後を弁てのこと  
 ちやまうりちやまうり誤りては兄を墻に圍とも外其悔を禦らる詩も  
 ちやまうりちやまうり必竟おんこの心を勵し不忠とさるる赤心を  
 詮なまよとわかれ口説つ嘆きたれ小四郎首と尤右は打振鬨のあはれ  
 我此侍よ及ぶと身の甲斐かを恥てなり名武累世の老臣が零落を  
 云うが世も生産も多うり人の思ひ國戸となりははことなる  
 浅猿や雨の僻るを傲ゆるよ天罪忽ち報ひりて主君と知を棄てし

小栗卷之七

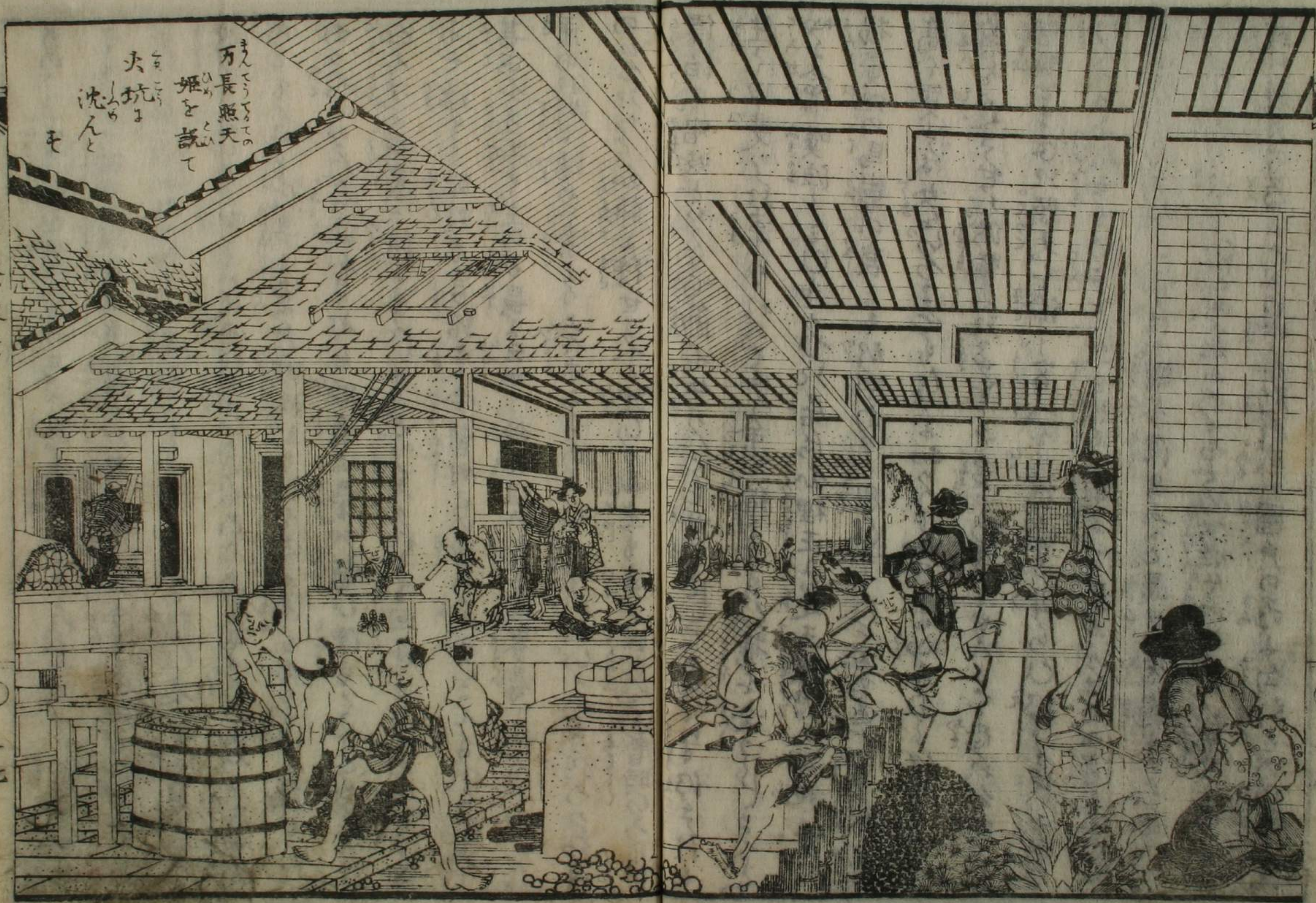
10

まぐ不忠の名を肩て。母世うらむ瀬のまぐら。かほ拙れ我らわの群云  
 存命居るとも。しうて主床と復古せん。汝のま二の忠臣なり。又ちまも  
 あるうれわ力成ほし。姫君を尋索て懸てより。許家ある小栗とのと  
 誓姻なり。ままふして名武の家を再興。その序もあるあふ。我身  
 の咎も保てて。まてまて。汝やまおが子どもに遭が。今日のま。諸やうま  
 うれども。此のなりとて。悪るま。なまて。忠義を。切りて。此の忘れが我  
 こく。永く朽名を。まさんと。能も。傳くく。もひ。云は。左。突まし。  
 刀を。右。し。か。人。と。刀。と。り。ま。喉の。吭。を。か。れ。絶。て。俯。伏。ま。ら。う。て  
 失。ま。り。小。介。の。今。ま。同。胞。の。別。の。涙。せ。ま。め。人。と。死。ま。ま。り。後。居。斯。て  
 果。ね。こ。た。な。れ。兄。小。四。郎。の。屍。が。近。近。ま。寺。院。ま。送。り。古。墳。一。基。の。土。と  
 かり。その。身。と。それ。より。姫。君。の。行。出。汝。捜。索。んと。六。浦。の。里。を。ま。出。たり。

不在話下再説照天姫と三田小巻を小買らふれ。いふなりゆくと。如と  
 易れ心もせざりけり。小巻の姫の容貌を。ま。桃。李。却。く。姫。と。芙蓉。耻  
 を。含。の。敷。色。な。れ。心。裡。か。ま。り。か。り。喜。び。これ。下。和。の。壁。な。り。縁。と。十五  
 城。も。換。え。れ。美人。なり。我。近。年。不。利。や。て。六。指。較。肌。り。ん。の。買。後。物  
 の。ま。く。美酒。を。飲。め。も。其。う。枕。ま。は。け。ど。易。く。睡。ら。ま。り。し。ふ。今日。こ。の  
 女性。を。保。く。此。ほ。と。の。鬱。情。勿。ち。ふ。散。れ。麻。食。を。た。め。て。易。く。り。常。を  
 お。す。苦。尺。魔。と。い。ふ。の。り。斯。る。室。を。保。て。久。く。貯。ま。へ。れ。ふ。の。ま。は。と。ま。ふ  
 船。舩。一。京。師。の。方。へ。赴。き。折。帝。岡。の。便。悪。く。皆。時。遠。州。相。良。よ。泊。敷。て  
 居。り。な。れ。こ。の。濃。洲。青。墓。と。い。ふ。所。に。万。長。と。云。の。の。り。其。家。代。り  
 旅。店。を。し。て。家。富。栄。へ。は。此。頃。ま。の。青。墓。の。山。陰。道。の。驛。路。ふ。て。い。れ  
 振。へ。る。地方。なり。万。長。が。家。あ。の。ま。く。の。娼。妓。を。貯。く。旅。人。の。足。を。止。め



たり。さればそれがなうまの京鎌倉もたれまする美人もあまふ上下  
 さらう大名をとりめ下賤ののりすても此釋路の宿りとするりのなをく  
 万長う許は旅宿一娼妓を揚て舞唄一旅情の鬱を慰めたり。さし  
 主万長も眉貌の勝れ奇舞糸井の道中社める女子と其品より  
 幾許の金銀をとりて賤ひられ然る万長不用のりて遠別相良  
 事りし。園戸小夜とありの小萩といふ女性を俱して是を考へ  
 今此両女に撃せりと里人の口唄を中を付く。尋ふ行くるく。實  
 小世に比なれ。笑女なれば。三百金に賤ひく。青墓の里に連歸り。娼妓ふ  
 せんと。やへへ。お照天姫の嘆き悲し。これを辞に。至夜に。行りわて  
 恥の守本尊に祈せ。多分の奴家不幸や。と多くの艱苦に遭。幾回  
 う危ありし。と。此佛の履庇より。免ることを祈り。今も。此地方に  
 漂泊し。娼妓となりて。前を失り。と。女子として。自ら守り。けり。も  
 生る甲斐なれ。事なれば。命を縮まし。多し操を全し。じ。多くと。  
 心。今。嘆泣し。こ。ひきう。れ。居。は。公。理。正。は。足。王。照。君。の。胡。地。は。娘。し。  
 揚貴妃の馬嵬の哀も。おや。あると思ひ。や。な。れ。て。哀。も。と。万。長。の。價  
 高く買は。女。を。い。ろ。う。も。た。れ。お。う。ん。と。さ。う。や。心。の。糸。も。運。て  
 客を迎させ。おは。様。し。る。を。と。多。く。の。後。を。せ。ん。と。を。恐。れ。公。利。し。る  
 娼妓をま。お。れ。照。天。を。諭。し。客。人。を。迎。ゆる。事。を。斗。ら。ひ。お。し。え。と。輕。と  
 へ。へ。る。お。彼。女。の。心。を。お。一。日。照。天。を。慰。め。て。云。へ。り。は。お。由。緒  
 ある方と。え。ま。お。し。は。か。斯。答。清。り。と。過。世。の。因。過。も。と。之。は。一。  
 今。さ。う。悔。て。詮。さ。べ。は。此。家。の。あ。る。や。の。女。性。せ。れ。ば。お。の。娼。妓。と。あ。る。と。  
 或。ハ。親。夫。の。為。め。の。中。を。別。れ。或。ハ。園。戸。の。為。め。勾。引。の。川。舟。に。沈



まへて  
万長照天  
姫を説て  
火坑  
洗んと  
そ

川界巻之七

のうらゝ生て恥を稟人より。死て操をきりんとされど。それぞ竹の窟角  
 とほらむ福ある朋輩の才と賤られ親同胞も再令。榮利を做すられ  
 とほら余もふあつふ幸のこともあつめと想ひえとて心づつても  
 客人を逢ひつらに馴らひ又と心慰むるもあり。奇なる人のあつ木竹  
 のこもろくは多と変れ波枕おひしをまゐる涙もあり。逐まれけりけ  
 のる人ふなれ名流かき好は睦言も憂以慰む便もと人しよよく  
 恥を決め奴家う凍よまじり人となえられども回意せよせよ泣き居  
 めそ泣め。娼妓も言語を今哲村の里の久香をえ人となは  
 其心をまわく。主の万長よ云や。彼女性の心きは容易に幼うがこし。  
 雨のれ耐し凍め素より岩木あもめぬ人なれば。いそぐらうらぬる  
 のゆぐれた。心静し待せま人と流らぬ。主も実と點流と。暫時のうらて  
 過されと照天の公露もどもうらうらももええ。前は娼妓の心を  
 えて其置るる奴悪之毒に主と高議。人なれ。夏照天を招き一樹の屋  
 一河の流を汲さる。是は定化生の縁とらり。あんな此所おつとせよ。ひ  
 既。幾月をう経多人。其交はきふめ。いよて教まわることあり。  
 今日すても志意と改と操を守らんと志まふ。このいととて。是再あれ  
 斯く居る。主の怒れ。何かなは方へ。賣渡され。幸に夏月が  
 えまらん。耐今日の。奴思ひまも。及。主の心強らん。まも。  
 娼妓とせん。とやもめ。角角。角角。腹悪らも。おひひ  
 まで。其心を推し。多人。是。想。斯。告。ま。は  
 かつと信。とて。照天。これ。信。と。娼妓。あ。お。は。は  
 い。う。ん。辛。苦。の。業。も。露。も。う。も。厭。ひ。は。と。あ。り。れ。情。は。做。ま。さ。き

業を教てととありたれお彼女をよほしぬと云ひ此家より三人の騾婢  
 のり各一ツ宛の業あり。そのうち一人は奴家が如きりの二十人  
 沐浴を湯を沸せり。それを用ゆる水の此より十八町彼より一町  
 法あり。この水人の肌として白玉の如くかきしゆの志を用以侍ら  
 たり。その日毎七荷汲とも。又一人を畜馬十疋が秣を茹く食しゆ也。  
 又一人を日くお七桶の芋灰積り。此三人が做業を一人してせぬ。娼妓とぬを  
 とも。主は損をかけきよらぬと喜んで其をよまうとす。是は容易ことお  
 める。尋常の人の做ゆることよ。おんよく此事を做らざるや否  
 照天これをせよ。人も及らざるは業ならぬ。做ると難しとおも。その人  
 其のゆに堪へて死とほらうと云ひ。心を決めてうらまえては  
 何の難きものぬ。明日より騾婢とらん。今宜しと云ふ。三ツの業は調ら

しと云へば。此の主人は笑えのげておられといと易らうと云へり。されど  
 彼女ら後工の相違して免角おと詮をなく。主万長は初と告げぬ。  
 主も案を差しとたれと既云知を語ひし人。又外母と云へきや。お  
 常言のごとく百貫の質の立一貫の公にして其翌日より照天と騾婢  
 おもひ下し。いと荒けなく紋はたり。あれは其做んやうを云へて。右少も  
 懈怠なからまを罪とし娼妓おせん。痛きうる照天。翠帳紅圍か  
 成人侍女よ乳人よと傳うれし身の浅様。其賤女と云ふ方見さる。人も  
 けも及びず。水汲桶ともあやげぬ。かれ荷ひは。拾八町。彼西の野邊乃  
 池水を汲んとて。そと出るは。公裡のうらやと推す。わけてあつたり。  
 羅綺おも堪へぬ。玉の肌は昔の錦さうく。身もあつらふは。袂衣の  
 裾のころめ。異るを足にす。つらば。懐き高掲。歩むを好も

その風寒をみて手足凍ゆねの行惱まはさまみたる人桶の  
 肩もほへど彼亦あろく息を衝此亦も体と肩を按身を苦しむ  
 道理の斯く一日とて一荷のみも汲ひはし雨は耐まら万長の  
 怒も觸れく事何あらん憂をうへざる悲しやと幸なれやどかき  
 に流す時涙もこれ涙が自ら心を励し我々望む業なれぬを  
 肉醬もたはとてもなご厭之きふらと辛うして池の邊に至り  
 其の光景をうらや度中なりは郊中の方十四五間むらりとも  
 圓池あり傍に一樹の松ありくちあわめて熟く思へど十八町が  
 水かた桶をたひひすうごふ幾許の幸苦をなせりさ身を此桶  
 一歩も行へずあはしすし七荷といふをいひて能く生き生存  
 恥せんや。死をうらや増さる。しげや此池は身を沈んとす

極め年頃すぬくせうは肌を守れ銀音お祈せんとくを哀ま  
 奴家いふは因過や。父母の死別と夫と生別と馬るかとも  
 身はく。くも死をうらひれと再び夫は還余父の執を報つめと  
 けれる命を今日まで存生とてと万長が使われりゆの  
 たりゆねとれる川行のうれ和ん悲しき今世沈み身を投ぐ。命  
 縮めくば今世うらしてあそびき呵責を受はりのうらに未可  
 ここと量られ。いと浅狭く悲しき南をや大悲の心抱き空  
 極樂に往生して父母は遭とて念と念と死ぬる身と極めても  
 妹背の還りしうすれて我夫今いゆ中てはゆきと申入執  
 別は今一回青墓の里れ鳥さる哀れを添ふる声もかきとめ  
 別且て啼や囁る憂をすめる照る影いつと斯く居るべ

死へとあつたりし時よ不思議や観世音の如く池中のあまらめりひく  
拜まれぬひたれがこら怪しと尋ひく。より仰きこりし観音と見えあつて  
さて此世の底に大悲の待せぬあふこそと又身を投んとせば折るら  
遙の松れ梢より光明赫々として観世音出現す。いと微妙の聲  
あふ衆生被困厄無量苦逼身觀音妙智能力能救世間苦心と云ふら  
せじて時を待ら自ら困運の附ぬんと宜かと見えしお忽然として形  
失せ松吹風の御音のそ耳よ響へく我もほ照天を奇異のありしは  
あまらりし中より有がや罪障消き此身をも大慈の救ひあつと松の  
梢を伏拜と感激の涙せぬあふと双の袂を湿らり。御あつて照天姫  
斯新こなりほ告といふと空しく做こころ人の一回なると業を我を  
十回なるとおぼふがなりとやあまらぬと男魂知しけり。桶あふぬ

汲入く肩お荷あふ不思議やあまらりし時ぞあも中々放り  
水桶の軽くとして辛苦なく一盞茶付は七斎といふあまら易く汲こ  
りし。さて又夫より野に出く桂を折んとあつりし。繪よこころあ  
はれと草薙し奈何して做りのまると知れぬあふ。いと居りけは  
かゝる処へ忽と笛吹つるし。あまらんと一人の童子牛もあつりしが  
姫をうていふ女性の此里よりあられぬ方におあふ貴人の世に愛を添  
ふ草薙女となりあまらぬ。あまらりし時ぞあまらぬと云ふ  
童子が草薙を折くまぬと云ふ。いとひき牛より下まで撫らるる  
りて薙々あふ。忽ち多くの草をほり。さてそれを大き中なるはけお  
入れ牛の脊に負し。いざ女性の間まで送りしわらわらと云ふ。あ  
照天を童子の信守なるを喜び。ゆく感謝してえりのけり。あまらぬ



照天姬

神童

考命女  
 四通仙の  
 冥助  
 貴の難  
 と脱

此業も馴れど、いかにせんと思はれ、いかに好むもかたは斯くして  
 優恤もあつて、眞實なれば、不審な事もあつた、いかにかまひや、名は  
 まひと、怨も同様に、童子もあつた、いかに清くあつた、宜なり、いかに  
 ちとねと、因縁なつて、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに  
 あつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに  
 心安地なれば、只顧その性を、同様に、耳せし、いかにあつた、いかにあつた  
 回を、いかにあつた、牛も、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに  
 其の、いかにあつた、子牛の、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに  
 を、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに  
 糸、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに  
 なた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに  
 な、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに  
 七桶の、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに  
 呆れ、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに  
 辛、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに  
 渾、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに  
 こと、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに  
 あ、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに  
 何、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに  
 と、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに  
 め、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかにあつた、いかに



さく。さあきつりて喜ぶる。照天姫、饗女のことかれば春まゝ  
 とて。夜へ尚古く垢けきまはして。好まざるものもほ。年の  
 暮るれをゆれ。のり多くていと慌忙く。此の服かろく。挿けける  
 こと。あはれ湯沐。せむれ。惟悴。かはれる。朝夕。汲る。あ  
 桶。おのが姿のうける。とらる。髪。の。削を。い。た。夜。破れ。垢き。て  
 世。あり。附。の。さ。ぬ。あ。露。む。り。も。似。と。我。う。ぐ。洗。儀。て。む。じ。を  
 ち。忍。び。泣。涙。の。ち。ぬ。れ。袖。ぬ。れ。と。涙。り。が。ち。な。は。方。の。上。を。想。ひ。屋。く  
 居。り。し。が。斯。む。り。辛。苦。を。ま。は。す。も。渾。駄。夫。の。み。ら。る。不。頼。も。つ  
 愚。ろ。り。と。せ。ひ。え。く。心。を。励。ま。朝。夕。怠。なく。我。做。業。と。勉。然。り。  
 主。万。長。の。光。景。を。こ。り。て。は。り。尚。其。才。是。の。ち。試。さ。る。や。と。  
 照。天。を。招。き。て。さ。り。り。ね。い。年。を。暮。暮。て。春。れ。も。う。め。を。ま。は。付。る。り。

我家のさく。しめて蓬萊の形を折愛お飾を春の壽お用ゆ  
 蓬萊の洞なり。香橙女萎。小松熨斗。昆布海老。二齋なり。あ  
 行。を。一。浅。め。く。買。い。こ。足。ま。う。家。の。制。なり。此。は。汝。任。さ。る。あ。ち。く  
 細。ひ。も。れ。よ。と。後。一。浅。を。よ。へ。世。後。り。て。買。ん。み。ま。ら。ぬ。と。お。り。あ  
 る。れ。と。そ。を。才。景。を。り。て。調。へ。海。の。高。を。價。を。出。て。買。え。ら。れ。あ。足  
 や。の。こ。る。あ。り。て。か。る。じ。り。其。の。み。な。る。空。く。還。る。や。あ。ら。い。う。ふ  
 辞。む。も。娼。妓。ま。ま。を。ぞ。よ。く。心。を。ほ。ま。し。と。云。は。え。く。出。し。かり。ね。照。天  
 を。物。買。こ。ら。う。い。の。本。何。も。さ。る。物。と。い。あ。を。知。ら。れ。あ。ら。い。う。ふ  
 忙。然。り。爾。め。れ。洞。へ。が。れ。娼。妓。あ。ら。ん。と。あ。は。ま。し。と。悲。し。く。何。か。へ。り  
 行。を。買。ん。と。主。の。門。を。あ。し。れ。と。西。へ。も。行。を。東。へ。も。行。を。躊。躇。せ。お。り。し。ふ  
 一人の翁。西の方より来る。のり。照天姫が光景をこりて。同くさる。

女性と奈何苦しむるの傍らや教色のいと憎はしこんてかま流りのつら  
 做ぐれ中もゆめゆめと有るはあ照天はひよも同せまふりの好もより  
 爾くのこをまへまふらるが奴家せんを知らぬがうせせむとこ  
 恨し公明を年も長あふががうせむもよへんあふめ。あを  
 慈悲の面をりて教へてんやと嘆きまねむ翁を傾けあはし  
 考へて居るりう噴嚏して云出をゆる。その容易かかぬみかららた  
 かり教を余もせんも難面なれば善悪をさうれ極ど好も做  
 多の整いよこともゆらん。よく慮となりまら山お往一銭をりて  
 童子を雇ひおん身と二人と小松と女茶とを穿身人然り耐ら耐ら  
 きて多くの小松と女茶をばぐ。さてそれを用力にばぐ。残しを解れる  
 を市おりておれ昆布海老干鰯と小交易とて。又それをもの用

りて。解るるをりて再び山は往香橙村は家あてかへる必せん  
 換ふ。とゆへはあそ照天ゆゆ感激。我商買の道を知らばと  
 りども斯做んよ十倍の利をばる小難き。此翁陶朱術ふ  
 堪能せりと篤く感謝して別るはあ。あまりの天あまか公明がわを  
 後日運を用く耐ら。今日の因を報ら。やと心小念。あう血還り  
 りんか何方へ行らん公明が奴家とてんてんたり。あまりの不思議さ  
 四五歩も立座りて捜索する。新うおんを。さて足も記する大菩薩の  
 権小公明と現れ。ひ妙智力の方便を授けま。我難を授け  
 のあ。いとま。有か。去。跡を伏拜を感。涙。恨。ひ。り。  
 さて翁の教をゆせ山へ入る童子を雇ひ女茶と小松をばる。耐ら耐ら  
 間ふ多く採り。足を負て市へ行行くの品を交易をばる。渾

存んで換りたる再び山家へ往て交易せし品の残をりて香橙と換る  
 小栗も又存んで換りたる。照天限りありきひかき久しき  
 散りの品を並入並足してさるりのやとあるふ万長これをえん  
 想ひつらる品も愛さる。數も増りちれば其支そのほごを感  
 びんと這回もまごこ已う謀の相遠とればを裡樂中とれど難  
 かりけきふ。けりもけりもけりも賞とる。

小栗外傳卷之七終



明倫志小著 考幣餘事 白紙摺明朝 快入本全四冊 文房賞鑒家必用之書也

題 畫 詩 剛 全二冊 一題 再 詩 選 全壹冊

吳穀先生撰輯 書畫比白宣 白紙摺明朝 快入本全 薄用摺懷中本全一冊

書家必用の小冊 諸君子常日案上小備置ぬすて  
 其用奉りて相在りて詩題重敷とれりて絶句  
 聯句ハ云も更なり數字中少少別冊小冊。其  
 其自在と得とる可也。實小書と云ふの君子  
 必携に相易の珍寶とも可箱小冊あり

書肆 大阪北久寶寺町心齋橋 前川源七郎梓

